



タイの首都バンコクから西へ140^{キロ}、カンチャナブリ県に1957年公開の英・米合作映画「戦場にかける橋」で有名となったクウェー川鉄橋を見ることが出来る。近くには、タイ国民から「一番美しい」と評される「エラワンの滝」もあり、国内外から多くの観光客がこの地を訪ねている。橋の下を流れるクウェー川を見ていると、静かさと雄大さは、奥美濃を流れる長良川を思い出させてくれる。

太平洋戦争中、旧日本軍によるミャンマーとタイを結ぶ泰緬鉄道建設においては、多くの外国人が犠牲となり、鉄橋近くの歴史博物館を訪ねれば、悲しい歴史を目の当たりにする。一方、自然豊かで、険しい山を見上げれば、細い2本のレールでできた泰緬鉄道が国境を越え、ミャンマーまで結ばれていたことに感心もする。

タイの「戦場にかける橋」

いつか「成長」の象徴に

岐阜信用金庫のバンコク駐在員事務所が開設した時期と重なり、2015年12月にASEAN経済共同体(AEC)が発足した。域内人口は欧州連合(EU)を上回る計6億2千万人で、域内総生産が2兆5千億^{ドル}(約300兆円)に達する巨大な経済圏が本格始動し、3年が経った。域内貿易は、経済成長に連れて徐々に増えている。特にタイから食料品をはじめ加工品が、カンボジア、ラオス、ミャンマーに持ち込まれ、それぞれ



映画「戦場にかける橋」で有名になったクウェー川鉄橋＝タイ・カンチャナブリ県

れの国では同じパッケージを見ることが出来る。モノの行き来が盛

んになり、併せて各国、地域でインフラ整備が進められているが、まさにベトナム・ホーチミンとミャンマー・ダウエイをつなぐ南部経済回廊(道路)は、タイのカンチャナブリ県を通過する。

過去の歴史において、国境や橋は物資輸送を遮断するために破壊されるなど、悲しい歴史を繰り返してきたが、経済発展につながるインフラ整備こそ平和の象徴であってほしいと願う。インフラ整備は道路から、鉄道輸送へといつか発展するであろう。戦後70年が経ち、タイにおいては過去の遺恨を晴らすようなコメントはなくなっている。「死の鉄道(Death Railway)」の名で知られたクウェー川鉄橋がタイとミャンマーの経済成長の象徴として、いつか変わることを心から願いたい。(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)